聖書翻訳者ブーバー

堀川　敏寛

序論　ブーバー研究の現状と方法論

21世紀のブーバー研究は、ブーバー学会誕生と新版ブーバー著作集ＭＢＷの刊行開始により、1960年代に確立した視点の脱構築と再構築を、まず主眼になされねばならない。第一に限られた情報から導き出された対話の哲学者という安易なブーバー像の再検討、第二に作為的に消された箇所がある旧版著作集*Werke*の見直し、そして第三に絞られたテーマの中から新たなブーバー像を発見することである。これらの視点を現在の研究者が達成するためには、現在はトータルなブーバー像探求ではなく、23巻の新版著作集の読解と評価を通した特定の分野における新たなブーバー像の発見である。

先行研究をふまえた上で、今後解明を要する点を列挙すると次の三点が挙げられる。一）聖書翻訳と対話的原理の影響関係はどちらからどちらへのものか。またなぜ両者が関連し合うのか。二）ブーバー聖書解釈の方法論は何か。旧約学でブーバーはどう評価されてきたのか。特に彼が聖書の根源的なものを求めると同時に、聖書の最終形態に見られる構造を分析する姿勢は矛盾しているように見えるが、どう整合性がつくのか。三）果たしてブーバーが意図した翻訳の目的とその方法論が、具体的な翻訳の事例のなかで実現されているのか。ブーバーはヘブライ語聖書を全て訳したため、各項目の訳語を検討し、翻訳理論が反映されているか否かを検討する作業。ブーバーが深く聖書を研究し、それを翻訳したことは事実である。ただし彼がそれを通して何を導き出したのか、その意

図は不明瞭なままである。その次に、聖書翻訳の目的、特徴、手法は、すでに研究者によって丁寧に整理されており、それらは聖書の音声や口頭性を翻訳のなかで表現することであるが、聖書翻訳の具体的事例から、ブーバー思想が導けるか否かの作業が必要とされよう。したがって具体的聖書翻訳と解釈から、我－汝思想が導き出せるかを解明せねばならない。

本研究の独自性は二点ある。第一に、聖書翻訳という主題に対して、預言者解釈の視点を採る点である。そこでは聖書翻訳の必要性を、偽りの預言という問題を回避するために、万人預言者論という発想がブーバーにあった、と筆者によって提案される。第二に、ブーバーによる聖書翻訳のみならず聖書解釈の手法が、ライトヴォルト様式／変化形成的対話法／R的・傾向史的分析という文学／対話／歴史の三次元的方向性によって構成されることを示し、それをもとにブーバー研究史のなかで取り上げられていなかった具体的聖書箇所の分析を試みる。第二編第四章「ブーバー方法論の聖書学的位置づけ」の結びでは、ブーバーの対話的方法論が聖書学で大きく二分された潮流である通時性と共時性を総合する可能性があることを提案する。

本稿は、第二編の聖書翻訳論を本論とし、それにいたるまでの予備的考察として第一編の我－汝思想が叙述される構成である。第一編では、ブーバー我－汝思想の成立には、聖書的生が要請されることを解明するために「我－汝から聖書へ」というタイトルが付けられている。その理由は、ブーバーが対話的原理のもとで基礎的存在論（現存在の存在論的分析）を試みていたのではなく、むしろ哲学的営みそのものを打破する汝との出会いを語りたかったからである。第二編では、ブーバーの聖書翻訳理論を明確化し、彼が我

–汝思想の視座から聖書を解釈し、同時に聖書を典拠にして自身の我–汝思想を考究していた点を示す。そこでは聖書翻訳手法のみならず、ブーバー聖書解釈の方法とその評価を検討する。そして聖書翻訳の最終目標が、我–汝の関係性構築であったことが解明される。

第一編　我－汝から聖書へ

本編では、ブーバー研究者ライナーの解釈「ブーバーにとって〔中略〕基礎的存在論的な考察と『あらゆる存在者と共に在るそれぞれの人間の生活における根元的態度』が重要なのである」が提題として挙げられ、果たしてブーバーは存在論を目指していたのか、という主導的問いが筆者によって立てられる。第一章三節の中でブーバーは狭義の哲学理解から、それを客体化・対象化また抽象化と問題視したが、つまるところブーバーの意図は、著作『我と汝』のみならず第一編第二章二節で論じられるように『神の蝕』の根本的原因でもある我－それの問題性を指摘することであった。ブーバー我－汝思想は、狭義の哲学である形而上学や存在論によって代表される我－それ的思考法を脱するために「決してそれに転ずることのない永遠の汝」である神との体験なくして、存立し得ない。それゆえ第一章から第二章にかけて、ブーバーの思索は、我－汝と我－それという二種類の関わり方による基礎的存在論の展開ではなく、むしろ我－それを打破するような我－汝関係の始原性に重点を置いていたことが示される。すなわちブーバーは人間存在を分析する哲学的人間学を通して、より根源的な我と汝の始原的結びつきを描写することが目的であり、我－汝と我－それによる二つの関係性はその現実を示すための説明方法であった。その

事態を、研究者バローは「ブーバー哲学の主発点としている基礎経験は、哲学の外での経験である、つまり宗教的経験である」と言及し、ブーバーの思索が哲学外の宗教的経験を基として成立することを主張する。このように我－汝思想が存立し、神の蝕が克服されるためには（第二章三節）宗教性が要求される（第三章二節）。この事態を、先行研究ではハシディズムを通して論じられることもあるが、筆者はこのバローの言説を支持するかたちで、第一編の我－汝の基礎論から第二編の聖書翻訳論を主題として選択したわけである。なぜならば、汝としての聖書を読解することが、神による語りかけの先行性を裏づけ、それを享受する宗教的体験の中で、読者の我－汝的態度が獲得されるためである。

ブーバーは哲学者というより哲学的人間学者、もしくは宗教的倫理思想家である（第三章四節）。人間存在一般を、我－汝/我－それという様態として基礎づける哲学的試みは、ブーバーの意図ではない。この点こそ、モルデカイ・カプランが「ブーバーは哲学大系の構築を目指していたわけではない」と、評価した理由である（第三章二節）。ブーバーにはその思索の出発的に、神と対面する実存を基礎にした宗教経験が明白にあり、それを表現するために使われた彼独自の概念が、我－汝関係や出会いであった。だからこそ、ブーバーの思想を追従していくと、いつの間にかそれはハシディズムやヘブライ語聖書における神一人関係という宗教性へと行き着かざるを得ないのである。それはブーバー自身が、これらの中に我－汝関係の原型があることを示唆したかったからだと筆者は考える。ただしその宗教性とは語りかけの受容や言葉との出会いであって、決してそれに転ずることのない汝との関わりが意図されている。したがって宗教性とは実定的宗教の中にではなく、ハシディズ

ムの倫理や聖書の言葉を聞く中で求められる「関わりに対する日常的な専心」である。ブーバー研究が、普遍性を目指す哲学ではなく、宗教性と切り離すことができない人間の具体的状況を方法論の出発点とすべき根拠がここにある。したがって第一編の最後でティリッヒがブーバー思想を「具体的普遍性」と評価したことは的確である。

第二編　聖書から我－汝へ

第一章から第四章にかけて、ブーバー/ローゼンツヴァイクによる翻訳聖書の誕生から完成までの生成過程、翻訳聖書の独自性、彼らの聖書翻訳の方法論が言及された。ブーバーの聖書翻訳の方法論には、彼独自のライトヴォルト様式という文学的批評法、R的・傾向史的分析という歴史的批評法、行為遂行的・変化形成的な対話法があり、これらは聖書解釈における共時性/通時性/外部性ないしは文学／歴史／対話の三次元的方向性によって構成される三次元構造になっている。そこではテクストの最終形態を大切にしながら、歴史的解釈の変遷を経ながらもなお維持されてきた統一性に敬意を払うものである。第四章「ブーバー方法論の聖書学的位置づけ」の結びでは、ブーバーの対話的方法論が聖書学で大きく二分された潮流である通時性と共時性を総合する可能性が提案される。

次に、翻訳箇所を分析することによって、ブーバーの方法論が実際に適応されているかが検討された。例えば、第六章のヤコブ物語や第七章のアブラハム物語における共時的な構造分析や形式的な用語使用を通して、ライトヴォルト様式の追跡法が見いだされる。ただしこれら物語のみならず、第八章のイザヤと第ニイザヤという時間的隔たりを内包する書の中でも、ライトヴォルトを追跡する手

法によって、そこには一貫した思想があることが判明する。このような通時性の中で、ある種の統一化された傾向があることに敬意を払うのが、ブーバーのR的方法である。特に『神の王権』『預言者の信仰』『モーセ』などのイスラエル信仰史が主題になっている著作では、R的・傾向史的分析方法がより中心的に取り扱われる。ちなみに本稿では後者の方法を採る事例がライトヴォルト様式に比べて副次的であるが、その理由は本研究では聖書解釈よりも聖書翻訳に焦点が当てられているからである。翻訳という作業は、伝承の生成過程というテクスト背後の歴史性よりもテクスト内部の文学的関連性がより重視されるものである。その中でブーバーは、彼なりの歴史性を表現した。それが先人達の様々な解釈を経ながらも変わらぬ統一的傾向があり、それを大切にする視座としてのR（ラッベーヌー：私たちの師）的方法や傾向史的分析法である。

更に、具体的な聖書箇所を採り上げ、そこで訳語の工夫が検討された。第五章で、これまでブーバーの神名ヤハウェとエヒイェの翻訳に関する研究はすでになされていたが、いまだ不明瞭であった我－汝との関連性が明確になる。また第六章ヤコブ物語と第七章アブラハム物語の解釈は、前者はブーバー自身の叙述が少なく、後者は多いのであるが、研究史の中では中心的に扱われてこなかった箇所であり、ライトヴォルト様式と我－汝の対話的原理が密接に関連していることが判明した。これらはブーバー自身が、自らの翻訳聖書朗読テープ作成のために選んだ題材でもあり、本人が主導的に解釈したものである。すなわちブーバー本人による聖書箇所の選好にこそ、ヘブライ語聖書を我－汝的に読解する姿勢が反映されている。具体的には、神名解釈を通して神の本性が対話的であることと、ヤコブ解釈を通してヘブライ的人間理解の本質が対面性にある

こと、そしてアブラハムのアケダー物語を通して預言者と神との関係が見て/見られる対話的相互性にあることが論じられた。

ブーバーの聖書翻訳と我－汝の対話的原理との関連性は、第九章「預言者の問題と翻訳の意義」を通して解明された。それは「偽りの預言」という聖書物語と同様、私たちの日常にも流布するという課題を克服するために、ブーバーは「万人預言者」という考えを持っていたという視点である。ブーバー聖書翻訳の意図は、読者が聖書を媒介として、神的な声という「語られる言葉」と預言者的に出会うことである。ただし読者が言葉に対して我－汝の関わりをもって向き合わない限り、両者が出会うことはない。翻訳とはこのように言葉と読者の出会いを目的とした作業である。この目的のため、ブーバーはヘブライ語原語の持つ音韻構造やリズミカルな配置という文体や様式を崩すことなく、ドイツ語訳を試みたのであった。翻訳とは両者が出会うための道をつくることである。したがってそこから先は、万人が“いわば"預言者となって直接言葉を聴くという私たちの関わり方が重要になる。それを筆者は、第二編第七・八・九章と結論で、ブーバーの預言者理解から論じた。すでにイザヤの中で示されていた「神の栄光は、全地に満ちる」という預言は、第ニイザヤの時代になり、預言者に限らず万人が神の語りかけを受け入れることが可能となった。それは民数記の中で、かつてモーセが望んでいた万人預言者論が具体化したことである。そもそも預言者の本質とは、自らの告知する言葉が民に受け入れられず、挫折することが第八章五節で論じられる。というのも彼らは偽りの預言を告知する恐れがあり、預言の成就には危険性がともなうからである。ただし挫折した預言者たちの告知は、未来への希望としてその後も存続する。

第九章では聖書の理解と誤解を区別する客観的基準は存在しないことが論じられた。そもそも聖書言語は不変的なものではなく、読み手の受けとり方によって意味が変遷するものである。それゆえ、聖書のメッセージを、そのままそれとして受け取ってはならない。なぜなら聖書の中で語られる言葉は、ただ汝として読み手との関係の中でのみ、伝達されるものだからである。聖書翻訳者は、読み手に対して、あくまで語られる言葉への窓口を提供することにとどまる。読み手が直接的に神の言葉を受け入れる万人預言者主義を、ルターの言葉で表現するならば万人祭司主義である。ただし私たち読者が預言者になることはなど不可能である。というのもマラキを最後に、預言者は現代にはもう存在していないからである。それゆえ語られる言葉と出会うために私たちに必要とされるもの、それがまさに各言語へと翻訳された聖書なのである。

このように第二編を通して、ブーバーが聖書の中から捉えようと試みた根源的なるものが、我－汝の関係性もしくは対話的原理であることが判明する。したがってブーバーの我－汝思想とは聖書の宗教性理解を通して明らかになる（第一編）と同時に、ブーバー自身が聖書解釈を通してその中にある我－汝性を表明している（第二編）ことが明らかにされる。このように彼の思想は「我－汝」と「聖書的宗教性」との循環関係の中にある。